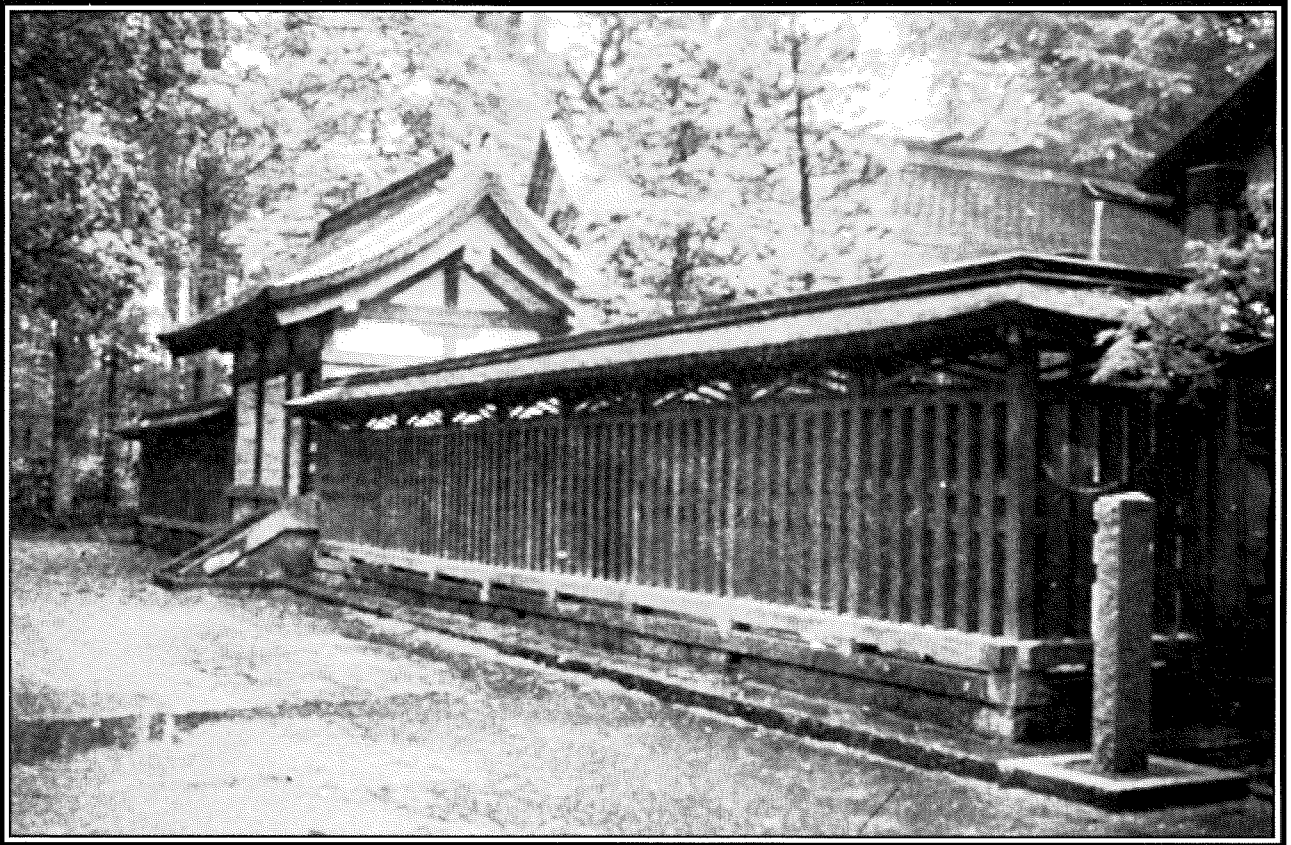


あるむぜお75

府中市郷土の森博物館だより

al museo NO. 75

2006年3月20日



大国魂神社本殿を側面から写す 昭和36年(1961)7月撮影(写真No.229-03b)

目次

- 1-2 宮本常一の見た府中 その4
 大国魂神社・くらやみ祭を撮る
- 3 展示会案内
 あすか時代の古墳—検証！府中発見の上円下方墳
- 4-5 ノート 武蔵府中どんと焼き事情
- 6 シリーズ体験学習の砦
 博物館に田んぼがある！
- 7 最近の発掘調査
 西府町発見の古墳からハニワが出土
- 8 たまRIVER WARS ⑫新たな希望

笛や太鼓にさそわれて
村の祭に来てみたが

という童謡がある。家の近所で子供たちが笛を吹き、太鼓をならし、御輿をかつぎまわっているのを見て、「ああ今日は大国魂神社の祭か」と思った。そして何となく御本社へまいってみる気になった。道をおいていると子供づれの人たちが幾組もゆく。「このあたりでは祭へまいるのにバスに乗らない人も多いのか」と私はほんの少々うれしくなった。

宮本常一「太鼓夜話」

(1974年 日本観光文化研究所『あるくみるきく』
No.87「特集 武蔵府中」より)

宮本常一が府中を撮りだしてから亡くなるまでの約20年間で、判明しているだけでも1,000枚以上の府中の写真を撮影しています。そのなかで、自宅のあった新町周辺をのぞけば、非常に多くのカットを費やしているのは、府中市を象徴する場所の筆頭、大国魂神社（旧六所宮）にまつわる写真です。

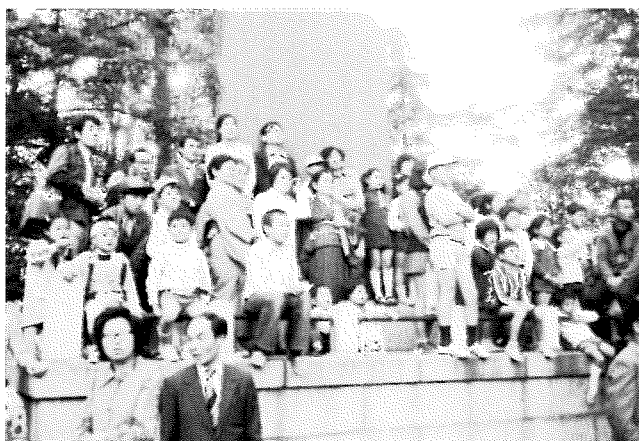
表紙は昭和36年7月頃、つまり転居してすぐに撮影されたと思われる大国魂神社社殿の写真です。この時は参拝する人、正面、参道とともに、一般の人があまり目にとめない、社殿の側面、裏側まで撮影しています。

ほかにも様々な角度から神社、およびその周辺を撮影しています。もちろんこれ以外に正面から撮影した写真もありますし、現在ではなくなってしまった参道の杉の木、狛犬、境内の図書館なども撮影しています。

そしてそれ以降、ことあるごとに大国魂神社とその周辺は彼の被写体となりました。府中市史の編さんにかかわり、買い物や図書館を利用するなど、大国魂神社およびそこに通じるケヤキ並木を何度も通ったことがわかります。

そしてもちろん、4月後半～5月はじめにかけて行われる、府中を象徴するまつり、「くらやみ祭」についても関心を持ち、何度も撮影しています（ただし5月5日のそれも明るい時間帯の写真が中心ですが）。なおかつ、その際繰り出される太鼓については武蔵野美術大学のみなさんとともに詳細な調査を行っているため、その資料写真を多く残しているのです。

最近発見したのですが、偶然にも、現在確認されているなかでもっとも古く撮影された府中市の写真は、



石碑にのぼり、くらやみ祭を見物する人々

昭和48年（1973）5月撮影（写真No. 1075-01）

府中に住む前の昭和36年5月3日、NHKの仕事で当時住んでいた港区三田の渋谷邸から神奈川県津久井町まで甲州街道を通り向かった際に車窓から撮影したケヤキ並木でした。日付からもわかるように、おりしも府中はくらやみ祭の最中。その時撮影された写真は二枚ありました。その一枚には明らかに自転車に乗るハッピー姿の男性の後姿が写っています。

大国魂神社は旧武蔵国を代表する神社であり、その祭礼くらやみ祭は、市民どころか広範囲の人々をまきこみ、大々的に太鼓を打ち鳴らし、多くの人々が見物に来る…。民俗学者宮本にとって興味深いものであったに違いありません。

宮本の写真が祭礼全体を網羅しているとはとても言えませんが、昭和30～50年代の神社とくらやみ祭の姿を宮本流の視点で切り取った写真は、府中の歴史を考える際にさまざまな示唆を与えてくれます。

テーマ展No. 38

宮本常一

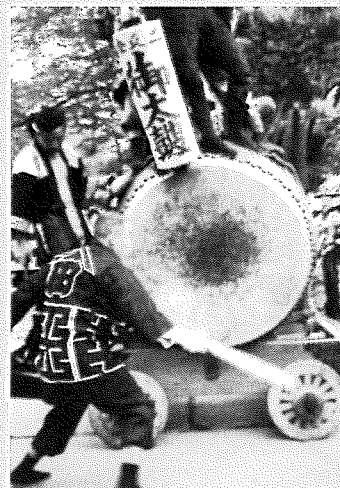
大国魂神社・くらやみ祭を撮る

会期：4月1日（土）～6月25日（日）

会場：本館常設展示室2階テーマ展コーナー

民俗学者・宮本常一の撮影した写真を通して、府中を象徴する存在、大国魂神社およびくらやみ祭を紹介します。そして彼が被写体とどうかわり、何を写したかについて紹介します。

※なお来年は宮本氏生誕100年にあたります。当館でもそれを記念し、2007年4月に特別展を計画しています。ご期待ください。



昭和38年（1963）5月撮影
（写真No. 373-11b）

展示会案内



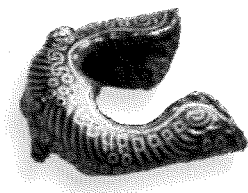
奈良県御坊山1号墳出土金銅製環座金具



奈良県高松塚古墳出土銀製刀装具【重要文化財】

4月29日(祝) — 6月25日(日)

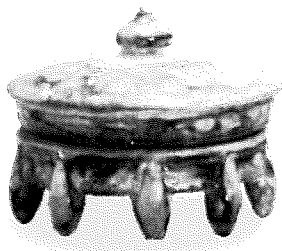
府中市西府町にある熊野神社古墳は、最近の発掘調査によって、飛鳥時代の上円下方墳であることが判明しました。上円下方墳は全国的にもとても珍しく、また保存状態も良好であったため、国の史跡に指定されました。今後は、古墳公園として整備していく予定です。



府中市熊野神社古墳出土銀象嵌靴尻金具

飛鳥時代といえば、古墳の代名詞ともいうべき前方後円墳の築造が止んだ後、大型方墳や大型円墳の時期を経て、古墳が徐々に小規模になって行く時代です。八角形墳や上円下方墳といった特殊な形の古墳も、こうした流れのなかで生まれました。

今展示会では、熊野神社古墳と同時代に造られた、各地の古墳からの出土品をもとに、飛鳥時代の古墳像を明らかにします。そして、このなかに熊野神社古墳を位置付け、古墳が造られた具体的な年代や、そこに葬られた人物像を考えてみようと思います。



奈良県御坊山3号墳出土陶碗【重要文化財】

《あすか時代の古墳の展示構成と主な展示品》

1. 発見！発掘！熊野神社古墳
武威府中熊野神社古墳出土品
2. 飛鳥の王陵とその周辺
牧野古墳出土品・植山古墳出土品・竜田御坊山3号墳出土品（重要文化財含む）・牽牛子塚古墳出土品
3. 関東の王墓
八幡山古墳出土品・駄ノ塚古墳出土品・割見塚古墳出土品・野々間古墳出土品
4. 熊野神社古墳の年代と被葬者像
石のカラト古墳出土品・清水柳北1号墳出土品・吉見かぶと塚古墳出土品・西原1号墳出土方頭大刀・高松塚古墳出土刀装具（重要文化財）・正倉院金銀鈿莊唐大刀模造品・飛鳥池遺跡出土富本銭
5. これからの熊野神社古墳

連携企画《弥生・古墳・飛鳥を考える》

「あすか時代の古墳」は、横浜市歴史博物館ならびに川崎市市民ミュージアムと連携して行う企画です。弥生・古墳・飛鳥それぞれの時代を各館が取り上げ、特に墓の様相から歴史像を探ろうとする試みです。3館の連携によって多面的で大規模な展覧会になっています。

◆ 横浜市歴史博物館

弥生の人びとの眠る場所—方形周溝墓と環濠集落—

4/8（土）— 6/25（日）

◆ 川崎市市民ミュージアム

古墳の出現とその展開

4/29（祝）— 6/25（日）

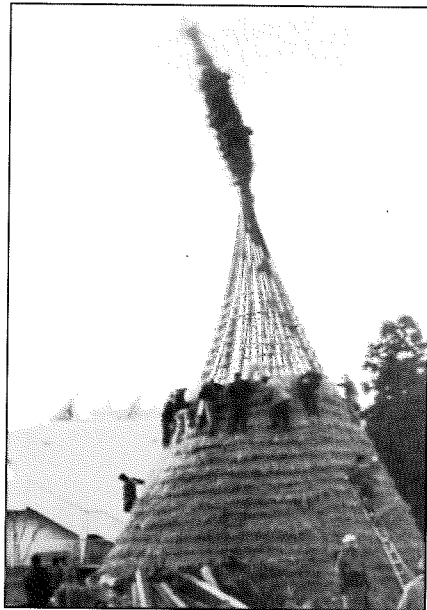
《弥生・古墳・飛鳥を考える》連携企画

あすか時代の古墳

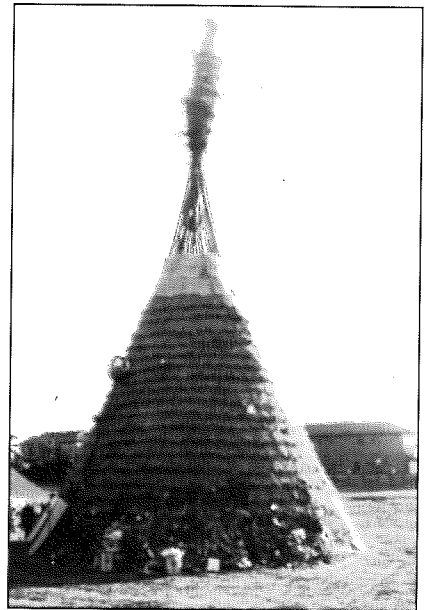
特別展 検証！ 府中発見の上円下方墳



2006年1月8日朝 押立文化センター隣に小屋を設営はじめる。押立では中学生の加勢が昨年よりはじまった。



ワラの壁を命綱なしでつけていく。日暮れになっても終わらなかった。(後背の建物は押立文化センター)



翌日。全体が完成した。正月飾りが不燃物部分を除き、周りに置かれていく。ダルマや御札類も一緒にくる。

「サイノカミ」から「どんど焼き」へ

どんど焼きといえば、正月7日以降に日本全国で行われる正月飾りを焼く行事として有名です。そのほかに「とんど」とか「どんどん焼き」、場所によってはその形状から「鬼の骨」とか呼ぶ場所もあります。府中市内でも各地で行われます。中でも木やワラを山積みにして燃やすだけではない昔ながらのどんどん焼きが、白糸台（車返）、押立、四谷で行われました。周辺でも隣の稲城市、多摩市、川崎市などにもその風習は残っているようです。今でも人によっては「サイノカミ（賽の神）」と呼び、主に農村で、道祖神（道の神と言われる）の祭りとして行われていたものです。

「サイノカミというひとは いじの悪い人で なべにくそしっこんで わーいわーい」

これはどんどん焼きの日に子供たちが歌ったという童謡です。市域では子どもたちが主催で正月三が日過ぎから15日周辺に、地域ごとに畑などでどんどん焼きを行っていました。いつのころからはじまったのかははっきりしませんが、「サイノカミ」または「セエノカミ」「ドウロクジン」などと呼ばれていたようです。

正月を迎え、子供たちが「サイノカミの竹くんない」などと言いながら集落の家々を巡り材料を集めたそうです。近所の竹やぶや当時すすはらいで使用した竹、そして農家のワラをもらい、広場（押立では多摩川近辺）に円錐形の小屋を立て、内部に囲炉裏をつく

り、15日（14日深夜ともいう）まで過ごし、最後に燃やしていたのです。その火で餅を焼いたり、焼け残った竹はドロボウ除けとして門前にかざるのだそうです。

お祭であったためこの行事には石の御神体が登場します。白糸台では御神体は「ゴロ石」と呼ばれています。この御神体を焼け跡に置き、人々は14日につくるまゆだんご等を供え祝ったといひます。サイノカミに御神体を用いるのは白糸台に限ったことではなく、市内人見地区（若松町）などでもありました。以前にサイノカミをやめてしまった人見地区ではご神体を地中に埋めたといひます。押立にも小屋と一緒に燃やす「ドウロクジン」と呼ばれる石があります。

昭和30年代前半、子供たちを中心にしたこの行事は禁止になりました。サイノカミの資金や材料集め、そして夜通し小屋で過ごすといった行事を、子どもたち主宰で行うことが風紀上よくないとされたためです。

しかし完全に廃絶はしませんでした。白糸台では昭和50年に15年ぶりに、担い手を変えて復活しました。現在は白糸台文化センターが主催で、大人中心となって行事を執行しています。押立でもその後昭和50年代前半に押立文化センターの行事の一環として文化センターで主催する形で復活しました。

その頃から「どんどん焼き」を正式名称とし、文化センターのイベントの一環として小屋を組み立て、その中での新年会等の行事が行われ、最終的にはしめ飾り

や門松とともにその全てを焼くというスタイルになったのです。

2006年のどんど焼き

復活後どんど焼きの小屋は毎年少しずつ大きくなっていったといいます。2006年(平成18)1月9日(日)は、早朝から晴天でした。朝8:00、市内押立、白糸台(車返)などで竹とワラをつかった円錐形の小屋作りがはじまりました。現在、府中市では押立、四谷でもどんど焼きの集いを行っており、押立のものは特に盛大で、府中30景に指定されています。今年、白糸台は軸になる竹を24本、押立は36本使用しました。かつて3メートル程度のときもあったものが、今年押立の小屋の直径は当初「末広りの8.8m」と聞きましたが実際は10mほど、高さは約20mになったそうです。

中断されたことはあるにせよ、これまで続けてきたものを維持していくことは創意工夫を伴います。たとえば日付は農家でない人たちが集まりやすい15日近辺の日曜日早朝になりました(雨天延期のこともある)。

市内最大の小屋をつくる押立では、近年そ竹の入手先を多摩川を渡った稲城市に求め、伐採しに行きます。また20m近い高さの、太い竹を束ねて垂直に立てるため、クレーン車をも利用します。壁の主材料となるワラの調達もなかなか大変です。かつて田園風景が広がっていた押立も住宅地へと変化しています。その結果かつて簡単に入手できたワラや竹などの材料を調達するだけでも大変な努力を必要とするのです。

また大きな小屋を設営し、燃やし尽くすためには、広い土地が必要になります。小屋が倒れたときに安全を確保できる、家や電線から離れた広さを必要とするからです。その確保が難しくなった四谷では、近年規模を縮小(竹12本)して行うようになりました。

さらに、近隣への配慮も必要になります。大掛かりな野焼きのために大きな煙が出ます。行事をよく知らない方から火災と間違われ、消防署に通報されることもしばしばだとか。設営から燃やす当日まで、防火の体制を整えることも必要です。かつて一つだった入口も、非常口としてもう一つ設けるようになりました。もちろん当日は消防車が複数待機し万全を期しています。白糸台は7:00、押立は7:30、四谷は8:00と、その発火時間が少しずつずれているのも、そうした消防対応の一環なのでしょう。

伝統行事、民俗行事という、はるか昔々から変ることなく伝えられていると思いがちです。しかし、どんど焼きの例を見ると、必ずしもそうではないことがわかります。記録や映像などで残された行事でもその行われた当時の状況にあわせてさまざまな変化が起こっていることを実感します。そしてそれでもなお受け継がれていくのも伝承のかたちなのだと思います。



内部は連日イベント会場。1月11日 新春の集い(おしるこ会)。



1月15日朝、あっという間に燃え崩れていった。



1979年(昭和54)の押立のサイノカミの小屋。明らかに2006年のものよりもはるかに小さい(清水幸四郎氏提供)。

博物館に田んぼがある！

小野一之

“ふるさと” 体験 郷土の森博物館に集められた古い建物のなかに、茅葺き屋根の農家があります。農家の前には田んぼがあって、米づくりが行なわれています。もちろん収穫だけが目的ではなく、博物館らしく、それも初めての人（＝たとえば子供たち）や多くの人（＝たとえばボランティアの参加など）とともにやっていけたら、どんなにか楽しいだろう。そんな理由で体験学習「こめっこクラブ」は、ずっと続けられています。郷土の森は、府中の歴史と自然を学ぶ博物館です。緑豊かな広い敷地全体が、かつての府中の街や村を再現したかっこうになっています。四季折々の移ろいのなかでも、ひととき印象深いのが、農作業の進行に合わせて展開する田んぼの景観ではないでしょうか。紙芝居を見ているような昔懐かしさも感じられます。

春が来て、田が耕され水が張られると、間もなく「田植え」。稲の生長とともに、田んぼの緑は濃くなり、秋の気配とともに、黄色味を帯び、すっかり黄金色になったら、豊作間違いなし。「稲刈り」をして、刈った稲がハザに干されると、風景は一変し、冬も近い。こうした景観を郷土の森ではいつまでも残していきたいのです。日本中見られなくなっても、ここでだけは続けていきたいものです。

“米づくり” 体験 郷土の森ではこれまで18回お米をつくってきました。18年やっても18回しかできないのです。どんなに急いでも早く刈り取れないし、怠けていれば収穫期を逃してしまいます。四季の移り変わりとともに、自然と足並みを合わせて働いていかなくてはいけないのが米づくりです。

「こめっこクラブ」に参加しているのは、小学4年生から中学生の毎年約30人。スーパーで売っている米が、どこでどうやってできあがってくるのか知らないのは、いまの時代、子供ばかりではありません。2000年以上の間、多くの日本人が繰り返してきた米づくりの1サイクルを体験してもらう意義は大きいのです。

「餅つき」はすぐにはできません。5月から働いて、ようやく12月に始めてお餅が食べられるのです。収穫祝いです。毎年の収穫高はずいぶん違います。サボったつもりはなくとも、夏の天気や台風の機嫌で大きく変化します。少ないと、ウルチ米のわけまきが減ります。多いときで1人1升半。自分たちでつくった米だから、すごくおいしい。でも考えてみれば、少ないですね。1年間がんばってこれだけです。家族でごはん炊いたら3日でなくなってしまう。だから、米づくりはたいへんです。

ら、米づくりはたいへんです。

「田植え」と「稲刈り」をイベントで楽しむのだったら簡単です。けれどほんとにたいへんなのは、その準備と後始末。暑い夏の日々の「田の草取り」だってあります。だから全部を経験してみることが本当は大切なのです。達成感もこの上ないものがあります。

“昔の道具” 体験 秋に刈り取ってホッとしたのもつかの間。すぐにその後のつらい「稲こき」「籾すり」が待っています。だからこの部分の道具の改良と機械化がいち早く進んだ経緯があるのです。

「こき棒」「千歯こき」「足踏み式回転脱穀機」などを同時に使って見るとよくわかります。「足踏み」の商品ラベルに大きく「天狗式」と書いてあるのは愉快です。とても人間の力ではできないことを、昔は天狗様のしわざだと言っていたからです。

道具の進歩がすばらしいことはわかったにしても、「でもね」という感想もみんな持ちますね。昔の道具は、使う人が仕組みをわかっていたから、自分で直して使うことができる。だから、使用期間がすごく長い。自分にあった形・方法・ペースで使うこともできる。このあたり、今のパソコンや携帯電話との違いです。

“社会” 体験 18年前、郷土の森で米づくりがスタートした頃、国の「減反」政策や「牛肉・オレンジ」の輸入自由化が大いに話題になっていました。これは今の「牛丼」の話につながっています。日本に果たして米づくりが今後必要なのかどうか、こんな議論も沸き起こりました。背後に、海の向こうの大国の存在が見え隠れしているのが少々気になりますが…。

その間に国内で大凶作の年があり、せっかく日本にきた東南アジアの米が受難に遭う事件もありました。食糧法という法律が廃止され、自主流通米とコシヒカリ信仰が広まりました。稲の栽培の起源が中国の長江中流域であること、日本でも縄文時代に稲作が始まっていたことなども、近年明らかにされました。

以上、これまで18回、子供たちと米づくりをしてきたなかで折々話してきたこと、話さずに思っただけのことなどを書き並べてみた次第です。

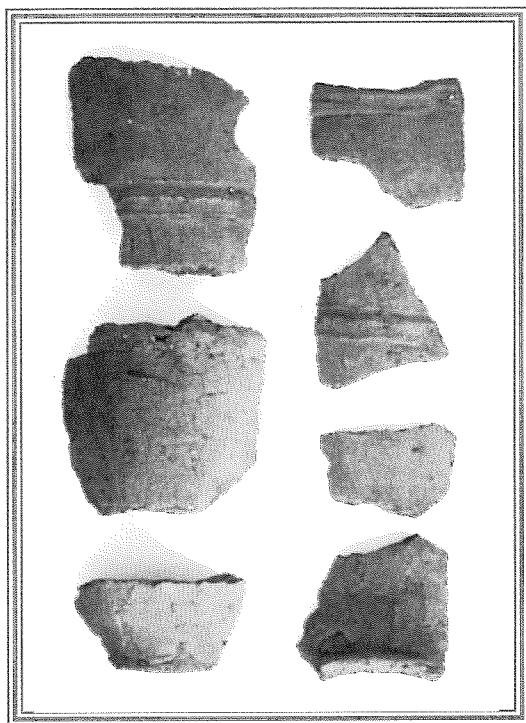


田植えをするこめっこクラブの子たち
品田健一氏撮影

最近の発掘調査

西府町発見の古墳から ハニワが出土

西府町一丁目 府中市教育委員会 西野善勝



出土した埴輪の破片

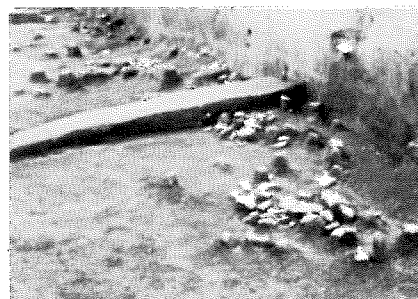
西府土地区画整理地区の遺跡発掘調査で埴輪が出土しました。

新年あけてまもなくの1月中旬のことです。市史跡 御嶽塚の北東方向の南武線のすぐ北側で、古墳の周りを囲む溝が検出されました。その溝中からたくさんの埴輪片が出土しました。破片は約700点ありました。

埴輪とは、古墳の頂上や周囲に並べて立てられていたものです。埴輪といえば人・動物・道具・家屋などをかたどった埴輪が思い浮かびますが、今回発見されたものは円筒埴輪と呼ばれるもので、全体は筒形状で、外面に突帯と呼ばれる3・4本の粘土の帯がめぐっているものです。復元すると50cmほどの高さになるものと思われます。作られた時期は6世紀代と考えられます。

これまでに府中市内では、美好町周辺や白糸台で埴輪が出土しています。しかし、小さな破片が全部で11点出土していただけでした。その量と比べると今回は、初めての本格的な出土といえます。

今回埴輪が出土した付近は、最近になって、たくさんの古墳が造られていることがわかりました。小規模な円墳がこれまでに15基見つかっていて、古墳時代後期の6世紀から7世紀に営まれた、群集墳と呼ばれる古墳群の存在が明らかになったのです。これは御嶽塚古墳群と命名されました。府中市では高倉古墳群、白糸台古墳群について三つ目の古墳群の発見です。しかし埴輪を並べた古墳はほとんどなく、同時代の古墳の中では珍しいものといえます。埴輪を並べた古墳と埴輪を持たない古墳で、どういう違いがあるのでしょうか。また、埴輪はどこで作られ、どのように運ばれてきたのでしょうか。古墳時代とその社会の様子を明らかにする上で興味ある課題です。その課題を解く手がかりの一つとして、今回の発見は貴重なものといえます。



円墳の周囲を巡る幅3mほどの溝の中から、たくさんの埴輪の破片が見つかっています。古墳のごく一部しか発掘していないので、墳丘の大きさははっきりしませんが、直径17m前後と推測できます。埴輪の破片は数mおきにまとまっています。古墳に立てられていたものが、周溝に落ち込んで壊れたまま埋まったのでしょうか。

たも RIVER WARS

⑫ 新たな希望

中村武史

長い旅の終着に向かい、再びイカダとボートを漕ぎ出した4人。夏の陽光は川面に陽炎さえ立ち昇らせている。何故大ザルが増殖した

情さえ近くに感じられる距離に迫っていた。男が大声を出す。「おい！あそこの干潟に立っているのは？」

タウ工が続いて絶叫した。「大ザルじゃねえか！何だっでこんな所に…」2艘の舟が干潟に向かって接近していくが、今度のサルは微塵も動かない。むしろ4人を迎えるような態度にさえ映る。「諸君、先程の質問に答えよう、これがもう一匹のサルだ！」男が叫ぶ間もなくイカダとボートは着岸し、4人がサルを取り囲む。なるほど近くで見れば一目で着くものとわかり、今までの捕物が滑稽に思えてきた。ではこの中身は何者なのか…「もういいよ、脱ぎなさい」やさしく男が声をかけるとサルの中から見馴れた仲間の顔が現れた。「セーセイコじゃないか！」エノキンの大声にバツの悪そうなセイコが口を開いた。「びっくりさせちゃってコメンね」ハツとしたようにハニーが最後の謎を悟った。「そうが、郷土の森に現れたのはセイコが…それでエノキン訳が分からなくなっちゃったのね」すかさずエノキンが反応する。「あの日、おじさん

はせせらぎ館で待機だったから、郷土の森は俺だけがサルで登場する手筈だったんだ。急に別の奴が出てくるから混乱したよ」遮るように男が説明を始めた。「私は君たちがふれあい教室で出会ったミスホの上司だ。ふれあい教室もせせらぎ館も川をまるごと博物館に見立てた多摩川リバーミュージアム構想の関連施設で、これから多くの人に多摩川のことを知ってもらいたいためのプロシエ



A NEW HOPE! 多摩川河口で未来を臨む
『新多摩川誌 / 別巻』(新多摩川誌編集委員会編)

トなんだ。みんなが川好きということを知ったのは説明するまでもないわよね」ここまで解説するとハニーは一呼吸置いて眩しうに青空を見上げた。
もう随分河口は近いと見え、やけに川幅が広い。思えば色々な多摩川の表情を見てきたものだ。一滴の水が線となって流れ出し、やがて山間部を急激に下降する。平野部に到達した流れは緩やかになり、面積を広げながら海を目指す。「六郷水門だ！」このような状況にあってもエノキン劇場は衰えを知らない。「昭和6年に設置された歴史のある水門なんだ。パリの凱旋門みたいな造りだろう？この辺りはハセヤススキがよく釣れるんだ…昔から漁業の盛んな区域さ。川は落ち葉が腐るなどして上流から下る間に養分が豊富になるから、河口の浅瀬には植物性プランクトンが育って魚が集まる。周りのアシ原は、干潮時で干潟にもなるから野鳥の宝庫にもなるし…河口は生物にとって絶好の環境なんだよ」一同は多摩川の話になると常に夢中だった。半信半疑の不安定な状況も忘れて純真な心に戻るのだ。だが、すぐに3人は現実へと押し戻される。大師橋を通過し、左岸にはすでに羽田空港のある浮島が見えている。右岸には河口干潟の続くこの川最後の土手があり、ウォーキングに汗を流す人の表

情さえ近くに感じられる距離に迫っていた。男が大声を出す。「おい！あそこの干潟に立っているのは？」
タウ工が続いて絶叫した。「大ザルじゃねえか！何だっでこんな所に…」2艘の舟が干潟に向かって接近していくが、今度のサルは微塵も動かない。むしろ4人を迎えるような態度にさえ映る。「諸君、先程の質問に答えよう、これがもう一匹のサルだ！」男が叫ぶ間もなくイカダとボートは着岸し、4人がサルを取り囲む。なるほど近くで見れば一目で着くものとわかり、今までの捕物が滑稽に思えてきた。ではこの中身は何者なのか…「もういいよ、脱ぎなさい」やさしく男が声をかけるとサルの中から見馴れた仲間の顔が現れた。「セーセイコじゃないか！」エノキンの大声にバツの悪そうなセイコが口を開いた。「びっくりさせちゃってコメンね」ハツとしたようにハニーが最後の謎を悟った。「そうが、郷土の森に現れたのはセイコが…それでエノキン訳が分からなくなっちゃったのね」すかさずエノキンが反応する。「あの日、おじさんはせせらぎ館で待機だったから、郷土の森は俺だけがサルで登場する手筈だったんだ。急に別の奴が出てくるから混乱したよ」遮るように男が説明を始めた。「私は君たちがふれあい教室で出会ったミスホの上司だ。ふれあい教室もせせらぎ館も川をまるごと博物館に見立てた多摩川リバーミュージアム構想の関連施設で、これから多くの人に多摩川のことを知ってもらいたいためのプロシエ